

# アブラハム物語の構造 II

水野隆一

(承前)

## 1.3. 11 : 27～14 : 24 <sup>(1)</sup>

アブラハム物語の冒頭であるこの部分には、移住・移動に関する記述が多く含まれている。それらを表にすると次のようになる。

	移動した人物	出発地	目的地／到着地 <sup>(2)</sup>
11 : 31	テラ	ウル	カナン／ハラン
12 : 5～6	アブラハム	ハラン	カナン／マムレ <sup>(3)</sup>
12 : 8～9	アブラハム	マムレ	／ネゲブ
12 : 10	アブラハム	ネゲブ	エジプト
13 : 1	アブラハム	エジプト	ネゲブ
13 : 3～4	アブラハム	ネゲブ	ベテル
13 : 11～12	ロト	ベテル	低地 (ソドム)
13 : 18	アブラハム	ベテル	マムレ

これら移動に関する記事と、それ以外の記事とを対比しながら並べると次の頁の表のようになる。

この表からこの部分の構成を読み解くために注目すべき点がある。第一に、語り手による注と考えられる箇所が存在することである。13 : 2 はエジプトを出発したアブラハムの経済状況に関する注、13 : 13 のソドムの住民に関する記述は、ロトがソドムに移住したことを記す直前の12節に対する注と考えられる。

## アブラハム物語の構造 II

移動	移動以外の記事と内容
	11 : 27～30 テラの系図
11 : 31	
	11 : 31～12 : 4 <sup>(4)</sup> לך-לך
12 : 5～6	
	12 : 7 土地の約束
12 : 8～9	
12 : 10	
	12 : 11～20 エジプトにて
13 : 1	
	13 : 2 アブラハムの経済状態
13 : 3～4	
	13 : 5～10 アブラハムとロトの争い
13 : 11～12	
	13 : 13 ソドムの住民
	13 : 14～17 土地の約束
13 : 18	
	14 : 1～24 アブラハムと王たち

第二に、一見、移動とそれ以外の記事とが交替するよう構成されているかに見えるが、実はそれほど単純ではないという点である。12 : 8～9と12 : 10では、移動に関する記事が続いている。しかし、12 : 10の冒頭では、物語の段落を表す לך-לך が用いられており、ここから新しいエピソードが始まることが示されている。従って、移動の記事ではあっても、12 : 8～9の移動はそれまでのエピソードを締めくくるもの、12 : 10の移動は新しいエピソードを始めるものと考えられる。<sup>(5)</sup>

また、上記のように13 : 2を前節に対する注と見た場合、13 : 1～2と13 : 3～4も、移動に関する記事が連続していることになる。この場合も、後で見

る通り、13：1～2はエピソードで始まる地点への到着を記し、エピソードを締めくくっている。これに対し、13：3～4は次のエピソードの場面となる場所への出発を記し、新しいエピソードを始めるものとなっている。

これらの考察を元にして、二つの表を見た場合、この部分が移動を軸に構成されていることが明らかになる。

(a) アブラハムの父、テラが移動を始めることで、物語が動き始める。テラによって始められた移住計画は、ハラン到着で一旦中断される。が、アブラハムの移動によって再開され、元来の目的地に到着する。テラの目的地として示されている「カナン」（11：31）が、アブラハムの目的地としても示されている（12：5）ことから、このように言うことができるだろう。


しかし、テラの目的地が漠然とではあってもある地方を指していたのに対し、アブラハムの目的地は「ヤハウエが示す地」（12：1）と特定されていなかった。それが、アブラハムがテラの目的地を「通り過ぎた」（12：6）理由であろう。ヤハウエが7節で出現し、「この地」と言うことで、その地域を特定する。それが、モレ／マムレである。

ところがアブラハムは、奇妙なことに、この地から移動して「更に行った」（9節）。最終的にネゲブへ移住し、このエピソードが終わる。従って、11：31～12：9が1段落となる。

このエピソードにおける移動をまとめると、

ウル→ハラン→モレ／マムレ→ネゲブ

となる。この移動の枠組みの中に、「行くべき地を示す」という約束（1節）と、「この土地」という約束の地の明示（7節）が挟み込まれている。

(b) 新しいエピソードを導入する指標「」によって物語に動きが与えられる（12：10）。アブラハム物語の発端と同じく、物語の動きは、登場人物の移動

## アブラハム物語の構造 II

と重ね合わされている。ネゲブからエジプトへと移住するエピソードの発端に対して、エジプトからネゲブへ移動する締めくくり（13：1。2節は1節への注）が置かれ、これらがエピソードの枠組みとなっている。

移動は、最も簡単な往復の図式、

ネゲブ→エジプト→ネゲブ

となっている。従って、13：1～2はこのエピソードを締めくくる到着の報告と考えて良いだろう。

(c) 前のエピソードを締めくくる移動に続いて、間断なく移動が続く。3節から始まるエピソードには、この他に、18節にエピソードを締めくくる移動が置かれていて、エピソードの枠組みとなっている。アブラハムの移動を記す記述はこれだけで、

ネゲブ→ベテル→マムレ

という地理的推移がある。

このエピソードに特徴的な要素は、ロトの移動が含まれることである。これまでロトは、殆ど語り手による注の形で、アブラハムと行動を共にしていたことが伝えられていた（11：31；12：4；13：1、5）。そのロトとアブラハムが「左右に」別れること、その別れはロトの移動によってもたらされることが語られる（13：11）。最終的にロトはソドムに天幕を張ることになる（12節）。<sup>(6)</sup>

ロトに注目して移動を図式化すれば、

ネゲブ→ベテル→ソドム

となる。アブラハムとロト、それぞれの世帯間での争いは、これまで行動を共

にしてきたロトとアブラハムを分離させる結果となった。

そしてこの分離こそ、アブラハムに対するヤハウエの土地の約束を引き出すものとなった。テキストは「さて、ヤハウエはアブラハムに言った、ロトが彼と一緒にいるところから別れていった後、『目を上げて、見てください、今あなたがいるところから、北へ、南へ、東へ、西へ。なぜなら、あなたが見ている土地すべてを、あなたに私は与えよう、あなたの子孫に、永遠に』」（14、15節）と記している。土地を受け取る者がアブラハムの「子孫」と明言されているが、それにロトが含まれていないことは、この約束が「ロトが彼と一緒にいるところから別れていった後」言い渡されていることから明らかである。ロトが別れて行くことが、この約束の前提となったのである。

(d) この後、多くの注解者が問題とする14章のエピソードが続く。<sup>(7)</sup> ここには移住の記事は含まれない。これに対し、軍事的情報として地理的な推移が含まれている。4人の王による5人の王の討伐（1～9節）、ソドムとゴモラの王の敗走（10～17節）に地理的情報が含まれている。<sup>(8)</sup>

現在の14章では、これらの地理的情報そのもの、さらには9人の王の実在性なども重要なものとしては扱われていない。アブラハムの行動に、動機ときっかけを与えるためにだけ、この箇所には、アブラハム物語の一部として記述されている。アブラハムがこの政治上の係争に関係するのは、ロトの救出のためである。<sup>(9)</sup> しかし、現在のアブラハム物語の文脈においては、このアブラハムの行動に別の意味が与えられている。このことに関しては、後に見る。

以上のことから、この部分には4つのエピソードが含まれていると考えられる。

- (a) ヤハウエの示す地へ（11：31～12：9）
- (b) エジプトにて（12：10～13：2）
- (c) ロトとの分離（13：3～18）
- (d) ロトの救出（14：1～24）

## アブラハム物語の構造 II

それでは、これらのエピソードに、15：1以下で見られたような主題的な連関は認められるのだろうか。

(a)と(c)のエピソードは、ヤハウエによる土地の約束という共通した主題を扱っている。その土地が与えられるのもアブラハムの「子孫」<sup>271</sup>と明言されている(12：7、13：15)。

(b)と(d)では、アブラハムが当時の権力者たち、外国の支配者たちと交渉を持つという共通したモチーフが扱われている。(b)ではファラオ、(d)ではソドムの王がその交渉の相手である。<sup>(10)</sup>

しかし、この二つのエピソードでは根本的に異なる要素がある。(b)では、アブラハムはサラを後宮に送ることで、たくさんの財産を手に入れている(12：16)。これに対し(d)では、アブラハムはソドムの王から分捕り品の分け前を受け取ることを拒否している。その理由は、「『私がアブラハムを豊かにしたのだ』とあなたが言わないように」というものだった(14：23)。先のエジプト滞在の折には、エジプトの富によって、しかも妻サライを「妹」と言うことによって、豊かになったアブラハムが、今回はソドムの富によって豊かになることを拒むのである。

このようにこの部分の4つのエピソードを見れば、A B A' B' という、並行的な配置になっていると考えることができる。

また、(b)と(c)に共通する要素を、アブラハとその世帯メンバーとの分離と考えることもできる。(b)では、自分の命を守るためにサラを妹だと言ったため、サラがアブラハムの下から「連れて行かれた」(12：15)。(c)ではロトと世帯間の紛争を解決するため、アブラハムから申し出て、「彼らはお互いにその仲間／親族から別れていった」(13：11)。

この中央部を囲む(a)と(d)には、<sup>272</sup> という語が共通して用いられている。12：2では「大きな国民」という表現に、14章では「諸国民の王」という表現(1、9節)に用いられている。<sup>(11)</sup> 「大きな国民とする」「あなたの名を大きくする」という約束が、「諸国民の王」たちの関係にも加わり、それらの王たちにも勝利することで実現している、と考えることができる。そしてこれが、

14章のエピソードがアブラハム物語に含まれている意味と考えられる。

このように見ると、この部分の4つのエピソードはA B B' A' という、囲い込み構造になっていると考えることができる。

このように二つの異なる要素において、これらのエピソードは関連しており、アブラハム物語のこの部分を一まとまりとしてみなすことができる。さらに、「マムレ」が地名として(12: 6、13: 18)、人名として(14: 13、24)用いられて、この部分に統一感を与えている。

この含まれる4つのエピソードがこのように構成されるとすれば、冒頭にあるテラの系図(11: 27~30)はエピソード間の関連からははずれている。従って、この系図は11: 27以下の一部と言うより、アブラハム物語全体をその直前の物語につなげる役割を担った連結部として考えられる。

#### 1.4. 22: 1 ~ 25: 18<sup>(12)</sup>

22章に記される「アケーダー」が、通常アブラハム物語のクライマックス、最終到達点と考えられることは既に見た。しかし、この考え方はテキストの構成そのものよりも、「神学的」理解を前提としており、その意味では、テキストそのものよりも読者の期待に基づいていると言えるだろう。本論はテキストそのものの構成を言葉遣いや主題の関連から探ることを目的としている。そのために、先にも見たとおり、22: 1の אַחֵר הַדְּבָרִים הָאֵלֶּה という句を、新しい部分の導入句と考えて、22章以下のエピソードの構成を見ていく。

(a) 「アケーダー」には会話と旅との要素が含まれている。1 b~2節の会話と15~16節の会話はほぼ同じ内容で進められる。それはイサクを「愛する息子」「独り子」と認める内容であり、前者はイサクを焼き尽くす捧げ物とするようにという命令(2節)を含み、後者には、アブラハムがその命令を実行したという認証(16節)が含まれる。これがエピソードの主題を巡る枠組みとなっている。

旅の要素に注目すると、3~4節の旅は5節に記されるアブラハムの発言によって中断されているが、6節で完成している。これに対応する旅は19節に短

## アブラハム物語の構造 II

く記され、その旅の終りとなっている。この二つの旅の記事を並行に図式化すると以下のようになり、この両者が枠組みとなっていることが明らかとなる。

アブラハム・イサク＋従者→アブラハム・イサク  
アブラハム＋従者 ←アブラハム

このような二重の枠組みの中に、アブラハムの **אֱלֹהִים/יְהוָה יִרְאֶה** という2度の発言が含まれる。1度はイサクとの会話の中においてであり（8節）、もう一度はアブラハムによるこのエピソードの総括においてである（14節）。

この2度の発言に囲まれて、アブラハムの行動が記される。この行動、イサクを焼き尽くす捧げ物としようとする行動は、最初に命令されたとおりに行動しようとするものであり、それは最後の神の発話によって認証を受けている（前述参照）。アブラハムの行動はヤハウエの使いによって一旦中断されるが（11～12節）、アブラハムの意識の中では、イサクに代わる山羊の犠牲によって完遂されたことになっている（13節）。

従って、「アケーダー」のエピソードは次のように図式化しうる。

A 命令と旅 1～6節  
B **אֱלֹהִים/יְהוָה יִרְאֶה** 7～8節  
X 犠牲 9～13節  
B' **אֱלֹהִים/יְהוָה יִרְאֶה** 14節  
A' 認証と旅 15～19節

22：20～24には系図が記されている。この系図は後にイサクの妻となるリベカ（23節）を物語に導入するためのものであり、24章との位置的対称のためにこの場所におかれている。

(b) 23章はサラの死と埋葬を扱うエピソードである。<sup>(13)</sup> 二組の会話が含まれ



る。第一は、アブラハムと「ヘト人」という漠然とした登場人物とのものである（3～9節）。アブラハム、「ヘト人」、アブラハムと三つの発話が含まれて一組となっている（4、5～6、7～9節）。第二はアブラハムとエフロンとの間のものである（10～15節）。ここにもエフロン、アブラハム、エフロンと三つの発話が含まれる（11、13、14～15節）。この二つの会話をサラの死についての報告（1～2節）、サラの埋葬の報告（16～20節）が取り囲んでいる。従って、このエピソードも次のように図式化する。

- A サラの死 1～2節
- B ヘト人との会話 3～9節
- B' エフロンとの会話 10～15節
- A' サラの埋葬 16～20節

ここで注目すべきは、エピソードが進むに連れて、サラのための埋葬場所を求める交渉が、ある土地がアブラハムの所有となったという主張へと、強調点が移って行くことである。<sup>(14)</sup> そして、この墓所の所有こそ、創世記において、アブラハムの子孫たちがカナンを所有することの保証と考えられるようになるのである（49：29以下）

(c) この後、アブラハムがイサクのために「故郷／親族」<sup>(15)</sup> から妻を迎えるエピソードが続く。このエピソードには、登場人物による物語の語り直しがあり、従って同じ言葉、句が繰り返して用いられている。24章全体が一つのエピソードを構成していることについては、以下のような図式が示している。

- A アブラハムの計画 1～11節
- B ナホルに到着する 12～28節
- X ラバンの家で 29～54 a 節<sup>(16)</sup>
- B' ナホルからの出発 54 b～61節
- A' アブラハムの計画実現する 62～67節

## アブラハム物語の構造 II

(d) 25章は、23、24章と比べると、統一感に欠ける印象を与える。1～4節にはアブラハムのもう一人の妻、ケトラから生まれた子どもたちとその子孫とが記されている。5～6節では、それらの子どもたちがイサクから遠ざけられたことが報告される。7～10節ではアブラハムの死と埋葬が、23章のエピソードを引用しながら記されている。12～18節にはイシュマエルの系図が記されている。

11節は、イサクが「祝福された」ことを語る。これは以前に約束されていたことがあるが(17:21)、直接には、アブラハムの家庭運営、つまり、イサクを唯一の相続人としたこと(5～6節)が神が追認したのである。

以上のことから、25:1～18は次のように図式化できる。

- A ケトラの子孫の系図 1～4節
- B イサクによる相続 5～6節
- X アブラハムの死と埋葬 1～10節
- B' イサクへの祝福 11節
- A' イシュマエルの系図 12～18節

このように見てくると、この部分には4つのエピソードが含まれていることが明らかになった。

- (a) 「アケーダー」(22:1～19)
- (b) サラの死と埋葬(23:1～20)
- (c) リベカを迎える(24:1～67)
- (d) アブラハムの死と埋葬(25:1～18)

これらのエピソードは、主題的にどのように関連しているのか。

(b)と(d)ではアブラハム物語の主要な登場人物、アブラハムその人と、サラの死・埋葬が記されている。これに対し、(a)と(c)では、その次の世代、イサクを

巡って物語が展開している。この点に注目すれば、この部分はA B A' B' と並行的に構成されていると考えられる。

一方、(a)と(d)を、誰がアブラハムの相続人となるか、という主題のエピソードとして関連しているものとも考えることもできる。すると、(b)と(c)は、相続人を巡る女性の物語として読むことができる。24：67の記述はこの関連を強く示している。「イサクは彼女を、自分の母、サラの天幕に入れた。彼はリベカと結婚し<sup>(17)</sup>、彼女は彼の妻となった。彼は彼女を愛した。イサクは母の後、慰められた。」**אִתּוֹ אִתְּרֵי אִמּוֹ**「母の後」という表現は、時間的、空間的のどちらをも意味することができ、ここでもその両方を含んでいると思われる。つまり、リベカはサラの後に来て、その場所を埋める存在として、イサクに受け止められたのである。

このように読むと、この部分はA B B' A' と囲い込み的に構成されていると考えることができる。

このように、アブラハム物語のうち、22：1以下の部分もそこに含まれるエピソードが主題的な関連をもって配置されている。しかも、読者の注目する主題が変わっても、関連が2つのレベルで見いだされうる。従って、ここに含まれているすべてのエピソードがアブラハム物語に不可欠の要素であると考えて良いだろう。

さらに、25：12～18に記されているイシュマエルの系図は、創世記における系図を導入する句 **אֵלֶּה תּוֹלְדוֹת** によって始められており、11：27～30と共に、アブラハム物語の大きな枠組みとして機能している。<sup>(18)</sup> また、「息を引き取り、死んで、自分の民と一つとされた」(17節)という臨終の様子は、アブラハムと同じもので(8節)、この系図をアブラハム物語の内部に位置づけることを可能にしている。<sup>(19)</sup>

## 1.5. まとめ

本論はアブラハム物語に2度ずつ現れる **אַחַר הַדְּבָרִים הָאֵלֶּה** 「これらのことの後」(15：1、22：1)と **לֵךְ-לֵךְ** 「行け」(12：1、22：2)を指標

## アブラハム物語の構造 II

として、物語を3部に分けることができる可能性を示唆し、この区分に基づいてアブラハム物語の表層構造を探ってきた。その結果、仮説的に使用した区分（I：11：27～14：24、II：15：1～21：34、III：22：1～25：18）の内部で、エピソードが主題的に配置されていることが明らかになった。従って、アブラハム物語を上の方の指標に基づいて3区分することは、テキスト上妥当であると考えられる。

この区分にこれまでの分析で得られたエピソードとその構成を加えると、次の表ようになる。<sup>(20)</sup>

## 連結部 テラの系図（11：27～30）

## I 11：31～14：24（ABA'B'、または、ABB'A'）

- (a) ヤハウエの示す地へ（11：31～12：9）
- (b) エジプトにて（12：10～13：2）
- (c) ロトとの分離（13：3～18）
- (d) ロトの救出（14：1～24）

## II 15：1～21：34

- A 契約（15：1～21）
- B ハガルの物語（16：1～16）
- A' 契約（17：1～14）
- C 笑い（17：15～22）
- D 割礼（17：23～27）
- X 誕生（18：1～21：2）
- D' 割礼（21：3～5）
- C' 笑い（21：6～13）
- B' ハガルの物語（21：9～21）
- A'' 契約（21：22～34）

## III 22 : 1 ~ 25 : 18 ( A B A' B' 、または、 A B B' A' )

- (a) 「アケーダー」 (22 : 1 ~ 19)
- (b) サラの死と埋葬 (23 : 1 ~ 20)
- (c) リベカを迎える (24 : 1 ~ 67)
- (d) アブラハムの死と埋葬 (25 : 1 ~ 18)

Iでは、「大きな民」が関心となっていたが、その内容は、アブラハムの言葉が表しているように、「豊かさ」(14 : 23)にあった。IIでも、主題はアブラハムの発言に含まれていた。それは、「私は子どもがないまま歩んでいる」(15 : 2)、「見よ、あなた(ヤハウエ)は私に子孫を与えなかった」(15 : 3)というものである。ヤハウエもこれに「あなたから出る者があなたを嗣ぐ」(15 : 4)と応えていた。この部分では、アブラハムとその周辺の登場人物、アブメレク、ロトの「子ども」が大きな関心となっていた。IIIでは、IIでアブラハムとサラの間に生まれたイサクを正当な相続人として認める、アブラハム、ヤハウエ双方の行為が記され、イサク以外の相続人から資格を奪う手続きが中心となっていた。

このようにIIとIIIの間には、登場人物上も、主題的にも共通したものがあり、一つながりの物語として読むことは容易である。それでは、これら3つの部分を統一したアブラハム「物語」として読ませる装置は存在するのだろうか。

(続く)

## アブラハム物語の構造 II

## 【注】

- (1) この部分の「資料」についてまとめておくと、次のようになる (Driver, *op. cit.*, pp.11, 15)。
- J ; 11: 28-30      12: 1 - 4 a                  6 -13: 5      7 -11a      12 b、13-18  
P ; 11:27      31-32                  12: 4 b - 5                  13: 6                  11b
- (2) 区切り ( / ) の前に地名がない場合、目的地が明示されていないことを示す。また区切りが用いられていない場合、目的地と到着地が同じことを示す。
- (3) 12 : 6 では מוֹרָה 「モレ」と記されているが、 אֵלוֹן という語と組み合わせられているため、後に אֵלוֹן または אֵלוֹנִי との組み合わせで用いられる地名 מְמַרָּה (13 : 18、14 : 13、18 : 1) と同一とみなして良いと考えられる。
- (4) この部分の冒頭と最後には、2つの世代が出発した時点の年齢が記されており (11 : 32、12 : 4) 、これらが枠組みとなっている。
- (5) 同様の注は、12 : 6 b、13 : 7 にも認められる。
- (6) עַרְסָרָם という表現の前置詞 עַר は場所を表すものとして訳すのが適当であろう。Westermann, Claus. *Genesis, 3. Teilband: Genesisi 37-50, Biblischer Kommentar Altes Testament I/3*. Neukirchener: Neukirchener Verlag, 1982, S.171 .
- (7) 注解者は、この章に描かれるアブラハム像が他のエピソードのものと異なることを理由にして、この章の「異質性」を主張している。Westermann は14章を、既にまとめられていた族長物語への付加とみなし、その際に、族長物語に現れる名前や要素を用いたと考えている。Op. cit., pp.192-193. Von Rad はこの章がどの資料にも属さないとし、歴史的状況に結び付けることによって引き起こされるであろう「混乱」に対して警告している。Von Rad, Gerhard. *Das erste Buch Moses, Das Alte Testament Deutsch 2/4*. Gottingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981, S.175. Brueggemann はその関心をアブラハムとメルキゼデクの出会いにだけ集中させている。それは、彼が注解の指針としているヘブル11章がそのこ

とのみを扱っているからであると思われる。Brueggemann, Walter. *Genesis, Interpretation*. Atlanta: John Knox Press, 1980, pp.135ff.

(8) この章のエピソードは、それぞれの区分に基づいて、次のように構造化されうる。

- A 4人の王による5人の王の討伐（1～9節）
  - a 4人の王名（1節）
  - b 5人の王名（2～3節）
    - x 征服された民族表（4～7節）
  - b' 5人の王名（8節）
  - a' 4人の王名（9節）
- B ソドムとゴモラの王の敗走（10～17節）
  - a ソドムの王敗走（10節）
  - b 略奪（11～12節）
    - x アブラハムの行動（13～15節）
  - b' 奪還（16節）
  - a' ソドムの王帰還（17節）
- B' メルキゼデクによる勝利の祝福（18～20節）

A' ソドムの王との交渉（21～24節）

伝承史的な視点からの分析については、Westerman, *op. cit.*, pp.190-2を参照。

- (9) 14節で彼の動機は、「アブラハムは彼の親族が捕虜にされたと聞いた。だから、……」と記されている。
- (10) アブラハムが財産を奪還した「敵」について、テキストは沈黙している（14：15）。1～9節には9人の王の名前がそれぞれ2度ずつ上げられている（1、2、8、9節）ことからすれば、ここでアブラハムが誰を追撃し、誰から誰の財産を奪還したのかが明らかにされていないことは注目に値する。つまり、語り手の関心は「歴史的」情報から離れて、アブラハムという登場人物の行動に移っていることを、この言葉遣いは表している。

## アブラハム物語の構造 II

従って、アブラハムが交渉するのも、ロトがその近郊に住んでいたソドムの王に限られている（22節）。他の王の存在は、この交渉のための場面を提供するためのものと考えられる。

- (11) 多くの現代訳ではこれを固有名詞と取り、「ゴイムの王」としている（新共同訳、NRSV、NJB、NAB等）。しかしLXXは βασιλεὺ ἐθνῶν と訳していて、普通名詞と考えている。

- (12) この部分の「資料」についてまとめておくと、次のようになる（Driver, *op. cit.*, pp.11, 15）。

J ; 22 : 15-18 20 - 24

E ; 22 : 1-14 19 24章 25 : 1-6 11b 18

P ; 23章 25 : 7-11a 12-17

- (13) アブラハム物語におけるこのエピソードの役割については、拙論「アケードの縛るもの」、『神学研究』（関西学院大学神学研究会）42号（1995年）参照。

- (14) 18節の言葉遣いは、「墓」としての用途よりも、「所有」の方に力点があり、その所有地にサラを葬ったと伝えている。これは「墓地」をゆずって欲しいという、4節に記されているアブラハムの言葉とは、認識の順序が異なっている。

- (15) ここで用いられる מולדת という語は、動詞語根 לך から導き出されたもので、「親族」と「生まれた地」の双方を表しうる。12:2ではその双方の意味で用いられていると考えられ、ここでも同じように2重の意味があると考えるのがよいだろう。

- (16) この文節には繰り返しが含まれていて（34~41節=1~8節、42~48節=12~28節。これらの繰り返しは殆どそのままである）、そのためにエピソード全体が長くなっている。

- (17) 動詞 לקח は正式な結婚を表す。

- (18) この句は25:19にも用いられてヤコブ物語の導入となっている。イシュマエルの系図は大きな族長物語に組み入れられている。



- (19) 同じ表現はイサク（35：29）、ヤコブ（49：33）にも用いられ、族長物語を通じて用いられている。
- (20) Brueggemann はアブラハム物語全体を図にして表している。この図の基本となっているのは、4つの神学的記述（12：1～9、15：1～6、18：16～33、22：1～9）が中心となっているという理解である。これらの神学的記述を含むエピソードとそれ以外を区別することで、図ができあがっている。また、22章を「解決」と考え、それ以降のエピソードを基本的に移行のためのものであるとしている。 *Op. cit.*, pp.108-15.

一方、Westermann は次のような方法で、アブラハム物語の構造化を試みている。彼によれば、これは、編集者の意図を知るための手段である。現在のアブラハム物語には、(1)サラの不妊とイサクの誕生を主とし、これに系図が結び付けられた軸、(2)土地の約束を主とする軸、(3)ロトとアブラハムの関係を主とし、この旅程表が結び付けられた軸と、3つの主要な軸が存在している。(3)がアブラハム物語のうち、最も古い層に属し、これに(1)の「約束」の部分が挿入され、(3)の外側に(1)の発端、サラの不妊と、結末、イサクの誕生がおかれた。このようにして、アブラハム物語の構造と伝承史とを結び付けて説明しようとしている。 *Op. cit.*, pp.125-30.

しかし両者とも、現在のアブラハム物語の構成を説明しようとしながら、完全にそれを遂行し得ないでいる。その理由は、一方が神学的関心から、もう一方が伝承史的関心から出発して、テキストの構成を問題としてないことであると考えられる。